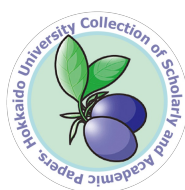




Title	玄鉄絢『少女セクト』論：ゼロ年代におけるレズビアン・ポルノグラフィの再編成
Author(s)	郭, 如梅
Citation	研究論集, 25, 49 (右) -66 (右)
Issue Date	2026-01-16
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.25.r49
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98787
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_rjgshhs_25_p049-066_r.pdf



玄鉄絢『少女セクト』論

——ゼロ年代におけるレズビアン・ポルノグラフィの再編成——

郭 如 梅

要 旨

本稿は玄鉄絢の「エロマンガ」と呼ばれる『少女セクト』（二〇〇三―二〇〇五年）を研究対象として、ゼロ年代の〈百合〉表象におけるレズビアン・ポルノグラフィの再編成について考察するものである。

女性同士の性表現を描くことには制限がある。男性同士の恋愛を描く（BL）ジャンルと比べ、女性同士の連帯をテーマにする〈百合〉表象は性表現の許容範囲が厳格である。他方、「レズ」は従来の男性向けの性的消費物であるが、性表現のクライマックスを保証するペニスの射精という運動表現が描かれなため、レズビアンを主題として取り上げる「エロマンガ」作品は少ない。

それに対して、『少女セクト』は、マンガにおけるポルノグラフィの共通する表現手法を踏まえ、「エロマンガ」の「レイプ・ファンタジー」と、〈BL〉の「愛ゆえのレイプ」と「魅力の証明としてのレイプ」といった物語の紋切り型を用い、女性同士のレイプ表象を描き出す。また、女学校と寄宿寮という舞台設定を通じて「ハーレム」を描写する。

レイプ表象では、「攻めの被害者」と「受けの加害者」という女性同士ならではの力関係により、被害者の身体を女性化する機能が停止される。ハーレム表象では、積極的に能動性を放棄する支配者の主体性を通じ、支配と従属の権力関係が転倒される。グループセックスの描写を通して、日常生活と性生活の分離と、性役割と権力関係の不連続性を浮上させる。

このように、本作は「エロマンガ」というメディアの特性に基づき、レズビアン性の表現を開拓する。さらに異性愛規範への収斂に抵抗しようとする少女同士の親密圏を顕在化する『少女セクト』は、「エロマンガ」の例外としてゼロ年代の〈百合〉ポルノグラフィの可能性を切り開く。

第一節 はじめに

女性同士の性表現を指すカテゴリーには、異性愛男性をターゲットとするボルノコンテンツにおいて、「百合」、「レズ」、「GL（ガールズラブ）」といった三つの言葉がある。媒体から見れば、マンガやアニメの作品には主に「百合」が使われる。「GL」は「百合」の類語として扱われる。AV（アダルトビデオ）の作品には、「レズ」が用いられ、男性の消費物としての性表現となる。一方、幅広い読者層を持つ「百合」作品には性表現が少ない。なお、「BL」と呼ばれる男性同士の性表現を描くジャンルと比べれば、「百合」作品では精神面の繋がりが強調される¹⁾。性描写があるが、精神面の要素を重視する。

このように、「百合」においては、性表現の許容範囲という問題点が浮かび上がる。ここでは、一旦「百合」というジャンルが形成された時期から変遷史を検討する。今野緒雪の少女小説・ライトノベル『マリア様がみてる』（一九九八―二〇一二年）が巻き起こしたブームにより、女性同士の連帯に対する消費の需要が高まった。それに応じて、専門誌『百合姉妹』（二〇〇三―二〇〇四年）及び後継誌『コミック百合姫』（二〇〇五年―）が創刊された。発信メディアの獲得に基づき、女同士の親密な関係を描くマンガの作品群は、誌名を反映し「百合」という名称で定着した。また、少女マンガの悲劇的なレズビアン像と異なり、『百合姉妹』と『コミック百合姫』が示したゼロ年代〈百合〉表象は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーを

横領し、レズビアンの「恋愛、セックス、事実婚」をラブコメディの形式を通じて描いている²⁾。

一方、『マリア様がみてる』に用いられる女学校の擬似的な姉妹関係という紋切り型により、〈百合〉表象は戦前期の少女小説の水脈を受け継いだものと位置付けられる³⁾。少女小説との繋がりに基づき、女学生に要請される性規範は〈百合〉表象にも押し付けられるようになった。ペニスを挿入する／されるポジションからの「攻め／受け」という役割分担を定義する〈BL〉と並べみれば、性表現をめぐって議論される〈百合〉の定義問題は、マンガにおける同性同士の性表現に内包する男女の非対称性を照射する⁴⁾。

マンガの性表現という点から〈百合〉とレズビアン表象を比較すれば、女性同士の性行為を描くことの困難さが浮上する。津雲つみのレディースコミック『Moonlight Flowers 月下美人』（一九八九―一九九〇年）は、否定的なステレオタイプに反してレズビアンを肯定的に描いたことが評価される⁵⁾。男女の性行為の暴力性を見せる動的な図像表現と対照的に、レズビアンの性表現は静的な表現技法を用い、キャラクターの安心感が強調される⁶⁾。レズビアン表象として評価されるやまじえびねの『LOVE MY LIFE』（二〇〇一年）⁷⁾も、レズビアンの性表現には静的図像表現が用いられ、性行為に伴う身体の運動表現が描かれていない。

専門誌『百合姉妹』及び『コミック百合姫』においては、「百合コミックスに十八禁ばりのものは収録していいものかどうか？」⁸⁾という作家の配慮が示されている。『百合姉妹』三号では「裏・百合姉

妹」という企画があり、二頁の紙幅を割き、メディア横断で官能小説、成人雑誌、ゲームなどのポルノコンテンツを紹介する⁹。一方、「キスマデで十分！/それ以上進むと十八禁雑誌のレッテルを貼られてしまう。(宮崎県/一向聴)」¹⁰という読者の意見が途絶えることがない。その結果、性表現に特化した姉妹誌『百合姫 Wildrose』の創刊は二〇〇七年まで待たなければならなかった¹¹。

性表現に関わるこうした議論を踏まえると、玄鉄絢の「エロマンガ」『少女セクト』の特殊性が浮上する。二〇〇三―二〇〇五年に男性向けの成人コミック雑誌『コミックメガストア』に掲載されたものの、『少女セクト』は〈百合〉表象の代表的な作品として捉えられた¹²。読者層の違いに伴い、「エロマンガ」から〈百合〉マンガに移行するというジャンル横断がなされた。このジャンル横断の再評価は、女性同士の性表現に対する許容範囲の両極端も転倒する。そして、「百合」というカテゴリーが定着するゼロ年代において、『少女セクト』は女性同士の性表現の可能性を示した先見的な作品と言える。

こうして、発表時期の先駆性、異なる読者層の交差、ジャンルの横断といった特殊性から、「エロマンガ」と〈百合〉マンガの両方の例外と捉えられる玄鉄絢『少女セクト』を研究対象として取り上げる。そして作品内部における女性同士の性行為の描かれ方に焦点を定め、『少女セクト』はどのように「エロマンガ」の紋切り型と〈BL〉マンガの表現技法を複合的に用い、女性同士ならではのポルノグラフィを描き出すのかを考察することが本稿の目的である。

第二節 性表現の紋切り型

『少女セクト』¹³は女子校と女子寮を舞台にし、性行為を繰り返す女学生たちの人間関係を描く「エロマンガ」である。親族を含めて男性キャラクターが排除される性別隔離の特殊空間に合わせ、校外の世界や人間関係は殆ど描かれていない。主人公の一人である藩田思信が属する寮は、「この子はね、みんな私生児なの」、「親が今どこで何してるかも知らないわ、だからこの寮が自分の家、寮生が本当の家族よ」(一巻一七三頁)というセリフにあるように、作中の登場人物は定型的な家族像に縛れていない。

また、「少女」たちに課される性的抑圧が笑い要素として用いられる。桃子は男女共学の転校先で毎日男子学生からの恋文を迷わず全て処分する。それに対して、男子学生は「流石は女子校育ちだ！繊細な男心を全然わかってねえ！」「女子校つてもっとウブでおしとやかな女ばっかりだと思ってたよ俺！」(二巻一五五頁)と落ち込む。純真無垢な女性像を転倒し、少女たちの性的欲望に関して男性を徹底的に排除する¹⁴。

物語の構成から見れば、一巻に収録されている各エピソードはそれぞれ独自のストーリーがある。もう一人の主人公の高校二年生の内藤桃子は風紀委員として、七組の登場人物の多様な性関係を進行させる役割を担う。その裏に、女学校の人気者で問題児でもある藩田思信の姿が現れる。同じ二年生の思信はハーレムのように寮生と愛情を共有しているが、桃子への恋愛感情を告白する。二巻に移る

と、桃子と思信が中心になった複数の三角関係が展開される。思信は桃子と学級担任との恋愛関係に嫉妬しつつ、上級生にレイプされる。その事件で、加害者に暴力を振るった桃子が転校させられ、思信の退寮に伴ってハーレムは解散する。その後、再会を果たした桃子と思信は継続的な恋愛関係を築き、モノガミーにとられない親密圏で共同生活を送る。

物語内容を分類すると、「恋愛」、「ハーレム」、「レイプ」といった三つのカテゴリーに分けられる¹⁵。「恋愛」ものが六篇で、「ハーレム」ものが七篇であるために紙幅はほぼ同様に見える。しかし、連続性のないストーリーが展開する「恋愛」ものに対して、「ハーレム」ものでは、主人公と無関係の九話を除いて他の六篇は全て思信関連の内容である。また、「レイプ」表象は主人公の人間関係に決定的な影響を与え、性的同意の有無をめぐり、ハーレム表象の権力関係と対照的に描かれる。本稿は権力関係の非対称性に着目し、「ハーレム」と「レイプ」のエピソードを主要な研究対象にする。そして「ハーレム」を性的同意のある支配／従属の関係性として、「レイプ」を性的同意のない関係性と捉える。

第二節 第一項 ボルノグラフィのマンガ表現技法

「レズ」というカテゴリーの存在自体が示しているように、女性同士の性行為は異性愛男性の性的消費物である。ただし、「成人コミックジャンル」では、昔からレズものが敬遠されてきた歴史もある。女性同士のセックスゆえに、「射精」でフィニッシュができず、オカズ

作品として男性読者に不向きとされていたからだ¹⁶。また、「百合」表象をけん引した『マリア様がみてる』に関して、「シスター・フッドを描いた作品を楽しむ男性読者が増加しているにもかかわらず、その需要に応えるエロ漫画は玄鉄絢の女子学園もの『少女セクト』などが目立つもののまだまだエッジに止まっている」¹⁷。

他方、共通点を見れば、男女の性行為を描く男性向けの「エロマンガ」と女性向けのレディースコミック、そして男性同士の性描写をテーマにする女性向けの〈BL〉マンガは、読者のジェンダーやキャラクターのセクシュアリティにもかかわらず、「受け」という挿入されるポジションが構図の中心を占める¹⁸。加えて、「第三者の視点から攻めと受けがなす性行為を眺める体験である」¹⁹という共通点がある²⁰。このように、ペニスと射精に関わる運動表現の欠落という女性同士ならではの身体的特徴があるものの、「受け」の中心化と流動的な読者の視点といったマンガ表現の共通点は、異性愛とは異なる性描写の可能性を育む。

第二節 第二項 物語定型としての「レイプ」

物語内容の共通点を言えば、「レイプ」表象は議論の焦点である。レディースコミックでは、レイプ要素を採用していないとは言えないが、キャラクターの主体性と読者の安心感を重視している²¹。それに対して、〈BL〉と「エロマンガ」に描かれるレイプ表象は紋切り型を明確に形成した。

性暴力の責任を被害者に押し付けて消費する「レイプ・ファンタ

ジー」²²について、被害者が「セックスによって心身が劇的に変化する」²³展開と、加害者が「強制力行使によって支配・所有する／される」²⁴快楽が「エロマンガ」の中核である。他方、溝口によれば、〈BL〉のレイプ表象は二つのパターンに分けられている。一つは「愛ゆえのレイプ」²⁵と名付けられ、主人公の二人の間で生じるレイプで、性暴力ではなくて加害者の愛情を被害者に伝える行為と見なされる。もう一つは「魅力の証明としてのレイプ」²⁶で、主人公と第三者の間で生じるレイプである。このパターンでは、主人公の性的な魅力を可視化しつつ、「女役」の性役割を与える機能が働く。このように、受けの客体化を娯楽として楽しむ「エロマンガ」と異なり、〈BL〉のレイプ・ファンタジーは異性愛規範の非対称な権力関係を露呈すると同時に、「攻め／受け」の形式を通して再強化してしまう一面がある。それでは、既存のレイプ表象の紋切り型と比較して、『少女セクト』はどのように女が女をレイプすることを描くのだろうか。

第三節 レイプ表現定型の転倒

第三節第一項 「攻めの被害者」の創出

『少女セクト』において、レイプを描くエピソードは四話、五話、一二話がある。レイプ・ファンタジーの紋切り型の採用に基づき、三つのエピソードは異なる女性同士の性暴力を見せる。四話と五話の物語内容は主人公の二人と直接に関わっていないが、登場人物の

関係性は思信をめぐる親密圏と対照的に描写されている。

四話では、養蕃部をハーレムとして多数の下級生を支配する三年生の鷺見雛が、二年生の弓梢朋衣をレイプして支配する。転校の初日に、朋衣は雛に誘われ部活を見学する。人気のない部室では朋衣は雛からのキスを積極的に受けるが、キス以上のスキンシップを拒否する。そして朋衣は雛に殴られ、「舐めろって言ったのよ」、「もっと奥まで舌を入れるの」(二巻九四頁)とオーラルセックスを強要される。朋衣は女性器に対して明確な恐怖感と嫌悪感を見せるが、オーガズムに達した雛の反応を見た朋衣は、表情が苦痛から困惑に移り変わる。そこから朋衣が消極的な姿勢から一変、雛からの命令を無視し、積極的に雛の乳房や膣に刺激を与える。その後、満足の表情で髪の毛を整える。翌日、制服のネクタイの代わりに首輪を付けている朋衣は、「犬も悪くないかなあって思ってた」(図一)と桃子に養蕃部に入部したことを伝え、迎えに来た雛に連れて行かれる。

性行為への態度は途中で転倒するものの、雛が挿入される側で、朋衣が挿入する側であるという構図は変わっていない。図像表現から見れば、受けのポジションを担う雛の身体は「エロマンガ」の紋切り型に沿って構図化される。また、物語内容では、被害者の朋衣のセックスによる心身の変化は明瞭である。特に、朋衣が犬のペットブレイに積極的に参加することになる結末は、「脅迫が不要になる」²⁷という「エロマンガ」の凌辱調教の典型的な展開に合致している。

従来のパターンに沿った図像表現と物語展開に反して、キャラク



図一 玄鉄絢『少女セクト』一巻（メガストアコミック、二〇〇五年九月）一〇一頁。

ターの権力関係では紋切り型にズレを与える力関係が描かれている。朋友と雛の関係性は、「挿入する／挿入される」と「攻め／受け」という性行為の構図の上に、「被害／加害」と「服従／支配」というねじれた力関係を築く。このように、注目すべきなのは、膣に身体の一部を挿入する朋友は性暴力の被害者である。挿入される側の雛は加害者である。これは、男性器が欠如しているからこそ成立する。「攻めの被害者」と「受けの加害者」という組み合わせは、挿入される側を被害者と捉える既存の認識と異性愛規範に基づく連続性に疑問を投げかける。

第三節第二項 「愛ゆえのレイプ」 定型の転倒

五話では、「エロマンガ」の紋切り型に合わせ、〈B L〉の「愛ゆえのレイプ」が採用される。舞台になった桃子の寄宿寮の中では、桃子に片想いする三年生の鳩旦落は同じ三年生の犬吠崎雪華に求愛されている。旦落は雪華に寮の公共空間で拘束され、「他のみんなに聞こえるわよ」（二巻一一五頁）という威嚇に屈服し、性的刺激を強制的に喚起される。旦落は雪華を桃子の代用品としてオーガズムに達するが、加害者の雪華は涙とモノローグを通して失恋の悔しさを見せる。

旦落と雪華の権力関係から見れば、加害者は挿入する側で、被害者は挿入される側として設定されている。そのために、規範的なジェンダー秩序は揺らいでいない。しかし、被害者の旦落は朋友と異なり、性行為以降も劇的な精神の変化がないという展開は、「エロマンガ」の紋切り型と〈B L〉定型とにズレが生じる。〈B L〉定型においては、キャラクターの恋愛成就に導く機能の停止に伴い、ロマンティックな描写に不可視化されるレイプの暴力性が露呈される。「エロマンガ」の紋切り型と比較すれば、被害者の旦落がレイプされても、桃子への恋愛感情の顕在化を通して性的主体性が再強化される。同時に、加害者の雪華は対人関係の承認欲求が満たされない。「エロマンガ」のレイプ・ファンタジーは支配／服従の権力関係を消費するものの、その中核には他者との関係性の希求が潜む。その意味で、失恋する雪華の結末は、従来のレイプ・ファンタジーと異なる濃密な感情を提供するように描かれている。

第三節第三項 性役割と権力関係の不連続性

一二話は主人公の思信の性被害を描くエピソードである。学園の人気者である思信はハーレムを持っているが、三年生の大神小百合からの求愛を敬遠する。ストーカー行為で思信の桃子への恋愛感情を知った大神は、桃子を転学させるように計画する。そして大神の予想通りに、思信の性被害を目撃した桃子は激怒して暴力を振るってしまう。その結果、桃子を転校させて、思信のハーレムは退寮と共に解体する。

レイプ表象の描かれ方では、一二話は、四話と五話に描かれている女性同士の性暴力表象に加えて、〈B L〉の「魅力の証明としてのレイプ」という紋切り型を採用する。

したがって、一二話では「他者を支配する快楽」という「エロマンガ」からの特徴と「過剰な愛情の可視化」という〈B L〉の要素が用いられる。ただし、被害者との関係性を一方的に作るうとする四話と五話の加害者と異なり、大神の犯行動機は主に思信の対人関係と親密圏を妨害し、思信との恋愛関係を希求していない。その振る舞いは恋愛成就の妨害として捉えられ、「エロマンガ」の「鬼畜凌辱系」と呼ばれる作品群の破壊衝動に近似する²⁸。救済のない鬼畜凌辱系の定型に及ばないが、性行為に関わる恐怖心と嫌悪感を消費物として描写する点は類似する。また、性表現の許容範囲が比較的緩い〈B L〉では、暴力描写を商品として特化する作品群は二〇一〇年代で形成された²⁹。その点で、ゼロ年代前半に女性同士の性表現で対人関係を求めている暴力行為に触れる『少女セクト』一二

話は先鋭性を示している。

また、思信と大神との性行為は「攻めの被害者」と「受けの加害者」という力関係を通して描写される(図二)。風紀委員室に閉じ込められた思信の不安と不快の表情とは対照的に、思信の両手を掴んで自らの乳房に重ねる大神は笑顔を見せる。そして大神は思信の左手の指を自らの女性器に触らせるのみならず、「あなたも一緒に気持ちよくななきゃ……」(二巻一一七頁)というセリフに合わせて思信にオナニーを強要する。

しかし、望まない性的刺激に泣き出した思信を一瞥もせず、大神は思信の指を道具のように扱い、一人で性的快楽を楽しんでいる。「もつと奥に……」「指を……」「全然痛くないよ……」という片言のセリフに加え、笑い声と喘ぎ声が混在する「あは」「はッ」「はぁッ」(二巻一一八―一一九頁)などの音声表記が写植から手書きの文字に移り変わる表現を通じ、大神の理性を失っている精神状態が示されている。数多くの効果線と共に配置される「わたッ、私ッ、イあッ、あなたに、ひッ、思信に犯されて」(二巻二一九頁)というセリフは、大神の一人完結の性的快楽と狂気を通して、女性同士の性被害を四話と五話より暴力的に描き出す。

一二話の大神、思信、桃子の三角関係は〈BL〉の「魅力の証明としてのレイプ」という紋切り型を構成する条件を満たす。思信の性的魅力が可視化されるものの、「攻めの被害者」と「受けの加害者」という構図により、〈BL〉の紋切り型の「受けに女役的地位を与える機能」が成立しない。攻めの性役割と被害者との齟齬を通じて、

〈BL〉における「加害≡男役≡攻め」と「被害≡女役≡受け」という異性愛規範の二項対立との差異を露呈する。

また、四話と五話の被害者と加害者の間では性役割分担が変わっていないが、被害者の態度が消極から積極になるという転倒的な展開が描かれる。それに対して、一二話では始終消極な態度を示している思信は、加害者の大神に性役割を「受け」から「攻め」に強要される。

大神は「そんなに私に触られるのが嫌?」「なら代わりにあなたが触ってくれる?」と言い出す(二巻一二三頁)。大神のセリフによれば、思信は攻めと受けの両方務めることができる。〈百合〉表象の特徴と捉えられる攻め・受けの交代可能性は提示されるが、一二話の思信の性被害は攻めのポジションを通して描かれている。思信はハーレムの「支配」者に与えられる「男役」と「挿入する側」の性役割と性的実践の遂行を強要される。

男からの身体的欲求と情緒的支援を担われる女という力関係と異なり、支配者として振る舞っている思信は、常に身体的な接触を用いて少女たちの情緒的な要求を満たす。大神にレイプされた直後、桃子に「あなた程の人がなんであんな人のいいようにされてるんですか」と聞かれ、思信は「だって、女の子に手は上げられないよ」と答える(二巻二二六頁)。異性愛規範から逸脱する思信の主体性は、女性同士の大神に利用されてしまう一面が提示されている。

こうして一二話では、女の性的主体性の限界と異性愛規範に基づく「支配」、「男役」、「攻め」の連続性が浮上し、〈BL〉の紋切り型



図二 玄鉄絢『少女セクト』二巻（メガストアコミック、二〇〇六年五月）一一三頁。

で特化された「暴力の宛先にされる女役・受け」という機能が働かない。『少女セクト』における女性同士のレイプ表象は、被害者の身体性の性別化を可視化し、性役割分担と権力関係との不連続性を指摘している。そしてレイプ表象の紋切り型に内包されるジェンダー、性役割、性的実践の首尾一貫性にズレを与える。

第四節 〈百合〉ハーレムの形成

第四節第一項 恋愛関係の多様化

レイプという暴力的な性表現に対して、性的同意のある非対称な関係性はどのように女性同士の性行為と組み合わせで描かれるのだろうか。ハーレム表象については、思信が持つハーレムは少年マンガに描かれるハーレムと複数の相違点がある。例えば、高橋留美子の『うる星やつら』（一九七八―一九八七年）において、ヒロインのラムと三宅しのぶは排他的な恋愛関係を確保するために、主人公の諸星あたるをめぐって競争的な関係性になってしまふ。登場人物の覇権的なモノガミーの親密性への追求を通じて、異性愛男性中心の権力関係が再強化される。

『少女セクト』の中のハーレム表象と比較すれば、朋衣の性被害を描く四話では雛は複数の下級生を支配して競争させ、養蕃部の部活という形式を通じてハーレムを持つ状況が提示される。他方、「今から私は思信様の犬です」（二巻四一頁）と宣言する燕条寺真弥は、既に思信に従属している諏訪部麒麟の勧誘により、思信のハーレム

への編入を決める。真弥は脅迫されることなく正気を保っている精神状態で、三回の問答を経て、思信との主従関係を確定する。

ただし、雛のような「いたいけな下級生を次から次へと毒牙にかける養蕃部部長」（一巻一〇三頁）という徹底的な悪役に及ばないが、思信の真弥に対する支配は「強請」と位置付けられる。同時に、真弥は「ご満足の様子」で「思信の忠実な犬」（一巻五五頁）と記されている。ここでは、暴力的な性表現と非対称な権力関係の複雑さが浮き彫りになる。人物紹介文によれば、謝罪としての性交渉の強要や主従関係の契約のみならず、思信が事前に真弥の性的同意を得られても、真弥が認識不足の状態で身体への虐待やグループセックスなどを行うのは、暴力行為として意味付けられる。その半面、真弥と思信のロマンティックなキスシーンに合わせ、真弥の献身的な愛情は繊細に描き出される。このように、思信と真弥の関係性では、暴力的な性表現と少女の儚い恋愛感情が織りなされている。

主従関係になっても、思信は真弥の恋愛感情の欲求に丁寧に対応しようとする。こうして、思信、真弥、桃子の三角関係は覇権的なモノガミーの形式と異なる恋愛関係を示している。思信の桃子への恋愛感情に嫉妬してしまう真弥に対して、思信は「私がまーや達に気を払えなかったから」、「ごめんね、自分の事ばかりで…でもお願い…もうちょつとだけ頑張らせて」と謝る（二巻六三頁）。思信は「どうかこれからも私のそばを離れないでいて」と要求するが、真弥はすぐ受け入れない。代わりに「でも私…彼女にまたヤキモチ焼くかも知れませんよ」と誠実に思信への独占欲を打ち明ける。「その

時はまた一緒に反省しようよ」と思信が提案し、二人は討議を経てそれぞれの関係性を調整し再確認する（二巻七六頁）。

二人の間での流動的な権力関係は性表現を通して可視化する。「触つてもいいですか」と確認する真弥に対して、「どこでも好きなだけどうぞ」という許可を得て思信の膣に指を挿入する（二巻六九頁）。受けのポジションで真弥がもたらす性的刺激と安心感を楽しんでいる思信は、真弥に自分の顔の上に座るようにと指示し、いわゆる顔面騎乗という性交体位を要求する。座られる側が呼吸などの行動を拘束される顔面騎乗では、支配者が従属者の顔の上に座るパターンが多い。その権力関係の反転に気付き、真弥は動揺と躊躇を見せる。そこで、思信は再び支配者のポジションをパフォーマンスし、「私の言う事が聞けないの？」（二巻七一頁）と真弥に甘える。こうして、二人は優位にいる従属者と劣位にいる支配者という姿勢でセックスを行う。

第四節第二項 権力関係の転覆

思信のハーレムのもう一人のメンバー、諏訪部麒麟の物語に移る。真弥と異なり、麒麟と思信の主従関係の土台は恋愛感情ではない。思信が桃子に拒否された夜に、麒麟は吉岡柴という同じ寮の後輩に求愛される。柴の恋愛感情を認識した麒麟は、思信との親密性を「思信様に服従している私が好きなの」、「思信様がいないと、私、ただれた生活しか出来ないから」（一巻一六三頁）と説明する。麒麟と思信との依存関係を知っても、柴は麒麟との性交渉を執拗に求める。

柴の積極なアプローチに基づき、麒麟は柴を自らの従属者として思信のハーレムに編入させる。

麒麟と柴の親密性は思信と真弥の模倣である。ただし真弥の性生活に執着心を持たない思信と異なり、麒麟は柴への独占欲を明確に示している。柴とのグループセックスに興味を示している真弥に対して、麒麟は「思信様ひとすじだったんじゃないの？」「柴には手を出さないで頂戴」（二巻一八〇頁）と不満を言う。そこで、真弥は麒麟を拘束して受けのポジションにさせ、「本当はきーちゃん背中攻められるの大好きなの」と言いながら、柴を攻めのポジションにさせる（一巻一八二頁）。すると、柴の丁寧なキスを通じて背中からの性的刺激を得た麒麟は真弥の腕の中で脱力する（図三三）。この女性器に関わらない性表現では、麒麟と柴の権力関係は性役割の交代によって転倒する。さらに真弥の主導により、三人のグループセックスは麒麟の受けを中心に展開する。

ここでは麒麟受けのグループセックスを二話の真弥受けのグループセックスと並べ、性表現を通して表出される権力関係を比較したい。二話のグループセックスにおいて、支配者の思信は攻めを担い、従属者の麒麟は従属者の真弥を拘束し、思信の指示通りに真弥の身体に性的刺激を与える。オーガズムに達した真弥を見て、「考えてみたら新入りが一人で気持ち良くなってるのは生意気ね」（一巻四八頁）と言いつつ思信は、麒麟の乳房に性的刺激を与えるように真弥に命令する。従って、最も受動的な立場にいる真弥は、専ら受けを担うのではなく、攻めと受けの両方を行う。また、思信のセリフ



図三 玄鉄絢『少女セクト』一巻（メガストアコミック、二〇〇五年九月）一八三頁。

によれば、女性同士の性行為においては、受けという性役割は劣位ではなく、性的刺激を最も楽しめるポジションであることを示している。この点でも『少女セクト』の性描写は異性愛規範による「受け、女役、劣位」の連続性との距離を見せる。

二話を踏まえ、一巻のおまけはさらに柴の編入によってハーレムの権力関係が転倒される。支配者の思信が不在で、柴は最も従属的な立場で性交渉に参加し、二話の真弥のように攻めと受けを同時に担う。真弥は麒麟の行動を拘束して柴に指示を出す、麒麟との親密性は対等な協力関係である。麒麟は真弥の思信への恋愛感情を理解し、真弥は麒麟の柴への独占欲に配慮する。こうして、真弥は三人の間の性交渉を主導するが、それは擬似的な支配者のポジションではなく、麒麟と柴の転覆的な性

的实践をサポートするための行動である。頭を真弥の股間に置く麒麟、麒麟の女性器をオーラルセックスする柴、柴の女性器を舐める真弥、三人の性交体勢が三角形を形成する。その錯綜的な絡みの中で、麒麟は真弥の顔と柴の女性器を見上げ、微笑みで「なんかちよつとしあわせ」（二巻一八五頁）という。このように、真弥と麒麟の性役割の交換と、支配者の思信と二重の従属者の柴の交代によって、性役割と権力関係の流動性、そして両者の不連続性がハーレムのグループセックスを通して示されている。

また、密かに嫉妬した真弥と異なり、麒麟は思信をエレベーターの中に閉じ込め、単刀直入に「内藤さんに会うためにわざわざ私を迎えに来てんでしょ」、「私に氣を使つて？」（二巻八九頁）と詰問する。「それでも私の事が好き？」と泣き出した思信に、麒麟は「好きとか嫌いとかじゃない。思信は誰にも渡さない。」（四四）と答え、恋愛感情と異なる執着心を示している。その定型からはみ出る対人関係の欲求に、思信は「私にどうしろって言うの……？」と動揺を見せる。

そこで、麒麟は理想とする権力関係を打ち明ける。「私はね……思信の召し使いになりたいの。そしたら思信は私に傳かれてお姫様みたいに暮らすの。着替えもお風呂もみーんな私がやってあげる。それで毎晩、裸で私を抱いて寝るの……！今日はお口でしてさしあげます……し・の・ぶ・さ・ま♥」（二巻九九頁）という長文の告白が、思信がオーガズムに達するシーンに配置される。つまり、麒麟は従属者のポジションを貫徹するものの、支配者の思信の能動性を

日常生活から性行為まで奪うことを希求する。思信はその要求を受け入れ、能動性を積極的に放棄し、そして支配者としての主体性が回復する。

麒麟の恋愛とは異なる対人関係の欲求は、アナルセックスを通して特殊化される。「何でおしりなの」と困惑して質問する思信に対して、麒麟は膣への挿入を「思信の好きな人のためにとつてあげる」と答える（二巻九八頁）。その意味付けは男女の膣性交に縛られているように見えるが、「内藤さんとの事は絶対ジャマしないよ」（二巻一〇〇頁）というセリフもある。両者を合わせて読めば、麒麟は思信の恋愛感情も尊重して共存しようとする。

第四節第三項 ハームレという親密圏

性被害の事件で、思信は寄宿寮を出て、女学校のハーレムは解体する。麒麟は従属者の証である私服を脱いで制服に着替え、ナレーションという客観的なポジションに移行し、思信のことを見守る。桃子と思信は二三話で再会を果たして恋人関係を築く。そして二巻のおまけで大人になった桃子、思信と真弥はハーレムを再構築する。麒麟と交代してハーレムに編成された桃子は、思信にも真弥にも対等な関係性を持ち、排他的な独占欲も薄くなる（四五）。二三話の再会で、思信からの「私とまーやで一晩中可愛がってあげるから」というグループセックスの誘いを、桃子は「私は思信がいいの！」と断る（二巻一四九頁）。しかし、成人になった共同生活では、桃子は真弥と二人きりで性交渉をし、「事と次第によっては真弥ちゃん



図四 玄鉄絢『少女セクト』二巻（メガストアコミック、二〇〇六年五月）九〇頁。



図五 玄鉄絢『少女セクト』二巻（メガストアコミック、二〇〇六年五月）一八四頁。

と駆け落ちしてやるんだから！」（二巻一九三頁）と思信への不満を発散する。同僚からの猛烈な求愛を受けて救援を呼ぶ思信に、「ちゃんと家に帰って来てくれれば」（二巻一九九頁）と答える。

モノガミーではない恋愛関係を土台にし、桃子のポジションはこれまで一致してきた日常生活と性的実践にズレをもたらし、権力関係と性役割の不連続性を浮き彫りをする。桃子の人物像を振り返れば、担任教員との恋愛関係を描く八話では、桃子は隼砥先生に「桃子はしっかりものだからさ」と褒められる一方、「桃子がいつも私の事、子供扱いするんだもん」、「私の方が年上だし、背も高いし、車だって持ってるんだよ」と言われる（二巻一四〇―一五頁）。そこで桃子は「どうやって甘えていいか、わからない」（二巻一六頁）と打ち明け、隼砥先生を性交渉を誘う。このように、教員／生徒の権力関係においても、桃子は能動性を示しながら受けの性役割を積極的に担う。

思信との恋愛関係が定着する一三話では、相互にオーラルセックスをする二人は攻めと

受けの役割を同時に担っているが、性行為に慣れている思信が主導する側として描写されている。他方、二巻のおまけでは、休日出勤の思信を玄関まで見送る桃子は男女の性役割をなぞるように見えるが、直ちに真弥からの性行為を受け、攻めのポジションを果たす。つまり、桃子は日常生活で常に能動的なポジションにいるが、性的実践では攻めと受けの性役割を流動的に担う。桃子がもたらす権力関係と性役割の非連続性によって、思信は愛される男役と支配者のポジションから解放される。大神の事件で男役を強要された思信は、会社の同僚に襲われても明確に拒絶し、身体の自己決定権を意識しはじめるように描かれている。

第五節 おわりに

本稿は玄鉄純『少女セクト』を研究対象として、ゼロ年代におけるレズビアン・ポルノグラフィの再編成について考察してきた。「レズ」という異性愛男性をターゲットするポルノコンテンツのカテゴリーに対して、少女小説と〈百合〉表象における性規範の要請、少女マンガにおけるレズビアン表象の少なさ、「エロマンガ」における女性同士の性表現の困難さ、といった制限がある。性表現の絶頂を保証するペニスの射精が描かれない一方、読者のジェンダーを問わずにマンガのポルノグラフィの共通点と捉えられる「受けの中心化」と「流動的な視点」が女性同士の性表現を支えている。マンガの図像表現を踏まえ、『少女セクト』では意欲的に他ジャンルの物語内容

の紋切り型、特に「レイプ」と「ハーレム」の要素が複合的に用いられた。

暴力的な性表現を通して他者への支配を楽しむ「エロマンガ」の「レイプ・ファンタジー」に対して、『少女セクト』は女性同士ならではの「攻めの被害者」と「受けの加害者」を創出する。そして効果線というマンガ表現記号を通じて、これまで静的に描かれてきた女性同士の性交渉は過激で動的に描写されている。(BL)マンガからの「愛ゆえのレイプ」と「魅力の証明としてのレイプ」といった紋切り型に対して、加害者の失恋により、恋愛感情によって隠蔽された暴力性が露呈される。また、「攻めの被害者」と「受けの加害者」との組み合わせを通じて、性暴力を受けた被害者に女役のポジションを与える機能が停止される。従って(BL)の紋切り型に内包される性役割分担と暴力の宛先との連続性が浮かび上がる。

レイプ表象に対して、ハーレム表象は性的同意のある非対称な権力関係として描かれている。主人公の思信をめぐる、献身的な恋愛感情を持つ真弥と、恋愛ではない依存関係を求める麒麟が主要な登場人物としてハーレムの中核を形成する。そして真弥は思信への愛情は揺らいでいないものの、グループセックスに積極的に参加するようになった。麒麟は従属者の自分が支配者の思信の能動性を奪うという親密性を要求する。こうして、恋愛と性行為に不連続性を与え、支配／従属の権力関係を転倒的に描き出した。さらに、もう一人の主人公である桃子のポジションにより、日常生活と性生活が分離され、性役割と権力関係の不連続性も表出される。

このように、『少女セクト』は性的消費物とされる従来のレズビアン像を横領し、異性愛規範に縛られない親密圏と性的実践をレズビアン³の性愛ファンタジーとして描いた。女学校と寄宿寮という特殊空間における少女たちの多感な悩みという特徴を取り組みつつ、結末では主人公の同性愛関係を一時期の性的逸脱に収斂させない。この異性愛規範に抵抗しようとする想像力は、『少女セクト』が「エロマンガ」の例外として評価された原因だろう。ただし、レイプ表象とハーレム表象の先鋭性に反して恋愛エピソードでは男女の性役割分担をなぞる一面がある。モノガミの恋愛関係における攪乱的な身体行為や性的同意のある暴力的な性描写についての考察は、専門誌『百合姉妹』と『コミック百合姫』に託して今後の課題とする。

(くお るーめい・映像・現代文化論研究室)

注

- 1 稀見理都(協力)アオヤギミホコ)「百合・レズエロ漫画 百合とは違う女性同士のもう一つの性愛コミック」安田理央、稀見理都編『アダルトメディア年鑑二〇二四』(イースト・プレス、二〇二三年十二月)六二〜六三頁。
- 2 郭如梅「少女マンガにおけるレズビアン表象の再編成」『日本近代文学会北海道支部会報』二八号(二〇二五年五月三十一日)四二〜五六頁。
- 3 久米依子『少女小説』の生成(青弓社、二〇一三年六月)一一一頁。赤枝香奈子「おめとエス」井上章一ほか編『性の用語集』(講談社、二〇〇四年十二月)二六七〜二七四頁。赤枝香奈子「百合」井上章一ほか編『性的なことば』(講談社現代新書、二〇一〇年一月)二七七〜二八六頁を参照。

- 4 郭如梅「ゼロ年代〈百合〉表象論」『層』一七号(二〇二五年三月)一二五〜一四三頁。
- 5 藤本由香里「私の居場所はどこにあるの?」(朝日文庫、二〇〇八年六月)二七一頁。
- 6 郭如梅「ゼロ年代〈百合〉表象論」『層』一七号(二〇二五年三月)一二五〜一四三頁。郭如梅「少女マンガにおけるレズビアン表象の再編成」『日本近代文学会北海道支部会報』二八号(二〇二五年五月三十一日)四二〜五六頁。
- 7 溝口彰子「同じ物語なのになぜレズビアンが疎外感を味わうのか」『ユリイカ』二〇一四年二月号(青土社、二〇一四年二月)一二四〜一二三頁。溝口彰子「国際マンガ展の文脈で『青い花』を考える」『ユリイカ』二〇一七年一月臨時増刊号(青土社、二〇一七年一〇月)一七〇〜一七七頁。
- 8 蔵王大志作画・影木栄貴原作『春夏秋冬』完全版(一迅社、二〇二一年十月)二〇五頁。
- 9 『百合姉妹』三号(マガジン・マガジン、二〇〇四年四月)一四六〜一四七頁。
- 10 『百合姉妹』三号(マガジン・マガジン、二〇〇四年四月)二〇五頁。最新刊は『百合姫 Widose』八号(一迅社、二〇一四年七月)。なお、二〇一一年に誌名が『Girls Love』に変更したことがある。
- 11 NOV執筆、中村成太郎構成「百合ヒストリー アーカイブ」『コミック百合姫』二二号(一迅社、二〇一〇年七月)二〇〇〜二〇三頁。綾奈ゆに「『百合クロニクル』ダ・ヴィンチ」二〇一八年三月号(KADOKAWA、二〇一八年二月六日)一七四〜一七七頁。
- 12 本稿の引用は玄鉄絢『少女セクト』一卷(メガストアコミック、二〇〇五年九月)、『少女セクト』二巻(メガストアコミック、二〇〇六年

五月)に拠った。

14 日本近代文学における女性同性愛の主要人物には、男との性的経験があるという設定が紋切り型のようにある。伊藤氏貴『同性愛文学の系譜』(勉誠出版、二〇二〇年二月)一六二―一六三頁を参照。

15 全一六篇のエピソードは次のように分類することができる。「恋愛」ものは一話、三話、六話、八話、一三話、「デイ・アフター・少女セクト」といった六篇がある。「ハーレム」を描くものは二話、七話、おまけ一、九話、一〇話、一一話、おまけ二といった七篇がある。「レイプ」をテーマにするものは、四話、五話、一二話といった三篇がある。

16 安田理央・稀見理都編『アダルトメディア年鑑二〇二四』(イースト・プレス、二〇二三年二月)六三頁。

17 永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補(筑摩書房、二〇一四年四月)二八〇頁。

18 守如子『女はポルノを読む』(青弓社、二〇一〇年二月)一三九頁。

19 守如子『女はポルノを読む』(青弓社、二〇一〇年二月)一八八―一八九頁。

20 三つのジャンルを比較する守如子の論考に加えて、永山薫の「エロマンガ」に対する考察と溝口彰子の〈BL〉への分析は一樣な観点を示している。永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補(筑摩書房、二〇一四年四月)二七四頁。溝口彰子『BL進化論』(太田出版、二〇一五年六月)八二頁を参照。

21 守如子『女はポルノを読む』(青弓社、二〇一〇年二月)一一一―一一二、一七一、一七四頁。

22 宇野常寛は「レイプ・ファンタジー」を「セカイ系」という作品群の特徴として唱える。しかし、セカイ系はポルノコンテンツを含むものの、ポルノグラフィのジャンルとは言い難い。他方、本稿が多く参照している守・永山・溝口の論考では、守はロビン・モーガンのいう「ポルノは理論であり、レイプは実践である」を引用し、永山は「ポルノ

がレイプを準備する」という翻訳を採用し論述を展開した。溝口は

キャサリン・マッキノンなどの反ポルノ運動の言説は引用しなかったが、性的同意のない性行為の描写を分析した。したがって、本稿が扱う「レイプ・ファンタジー」の文脈は宇野の問題関心と異なる。宇野常寛『ゼロ年代の想像力』(早川書房、二〇一一年九月)二三三―二五九、三二三―三三四頁。守如子『女はポルノを読む』(青弓社、二〇一〇年二月)二八頁。永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補(筑摩書房、二〇一四年四月)二二四頁。溝口彰子『BL進化論』(太田出版、二〇一五年六月)八三―八七頁。Morgan Robin, "Theory and Practice: Pornography and Rape," *Take back the night*, edited by Laura Lederer, William Morrow & Co, 1980, pp.134-140, を参照。

23 永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補(筑摩書房、二〇一四年四月)二一八頁。

24 永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補(筑摩書房、二〇一四年四月)二一九頁。

25 溝口彰子『BL進化論』(太田出版、二〇一五年六月)八三頁。

26 溝口彰子『BL進化論』(太田出版、二〇一五年六月)八四―八七頁。

27 永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補(筑摩書房、二〇一四年四月)二一九頁。

28 永山薫『エロマンガ・スタディーズ』増補(筑摩書房、二〇一四年四月)二二四―二二九頁。

29 堀あきこ「第八章 ポルノとBL」堀あきこ・守如子編『BLの教科書』(有斐閣、二〇二〇年七月)一四七頁。